

藤栄

ワキ 最明寺時頼

男 月若家臣

シテ 藤栄

トモ 藤栄従者

ツレ 鳴尾某

立衆 同伴者

ヲカシ 鳴尾下人

地は 摂津

季は 雑

「ゆくへ定めぬ道なれば。く。こし方も何処ならまし。」

「是は諸国一見の僧にて候。我いまだ西国を見ず候ふほどに。此度思ひたち西国行脚とこゝろざして候。」

「城南の離宮に趣き。都を隔つる山崎や。関戸の宿は名のみして。泊りもはてぬ旅のならひ。うき身はいつもまじはりの。塵のうき世の芥川。猪名の

小笹を分けすぎて。

「月も宿借る昆陽の池。水底きよくすみなして。

「蘆の葉わけの風の音。く。聞かじとするにうきことの。捨つる身までも有馬山。かくれかねたる世の中の。うきに心はあだ夢の。さむる枕に鐘遠き。難波は跡に鳴尾潟。芦屋の里に着きにけり。く。」

「急ぎ候ふ程に。芦屋の里に着きて候。日の暮れて

候ふほどに宿を借らばやと思ひ候。いかにはなる
塩屋の内へ案内申し候。

男 「誰にて渡り候ふぞ。」

ワキ 「諸国一見の僧にて候。一夜の宿を御かし候へ。」

男 「やすき程の御事にて候へども。あまりに見ぐるしく候ふ程に。御宿は叶ひ候ふまじ。」

ワキ 「見ぐるしきは苦しからず候。道に行き暮れたる修行者にて候。ひらに一夜を明かさせて賜はり候へ。」

男 「さらば御宿を参らせんと。いぶせき床の塵はらひ。」

地 「十符の菅薦。しきりに松風や。うき世の夢を覚ますらん。さていつの世の情ぞや。雨は降らねど此宿は。一樹の陰とおぼえたり。く。」

ワキ詞 「まことに御志ありがたう候。や。是なるをさなき人はよしありげに見えて候。たが御子息にて候ふぞ。」

男 「いや名も無き人にて候。」

ワキ「いかに仰せ候ふとも唯人とは見え給はず候。何の苦しう候ふべきまつすぐに御名のり候へ。」

男「何をか包み申すべき。是は芦屋の先地頭藤左衛門殿の御子息にて渡り候。」

ワキ「なふそれは何とてかやうに賤しき海士の奴とはなり給ひて候ふぞ。」

男「叔父御の藤栄殿に跡を押領せられ。かやうに不思議なる所にて御入り候。」

ワキ「言語道断の次第にて候。さて重書をば御持ち候はぬか。」

男「重書もこれに候。」

ワキ「そと御見せ候へ。」

男「いや／＼大事のものにて候ふ程に如何にて候。」

ワキ「そと見申してやがて返し申さうずるにて候。」

男「さらば御意にて候ふ程に。そと御目にかけて候ふべし。」

ワキ「何々芦屋の庄七百余町の所。一男月若に譲りおく
処なり。芦屋の藤左衛門尉家俊判。や。何とて
かやうの証跡たゞしきものを御持ち候ひて。御訴
訟は候はぬぞ。

男「其事にて候。運の尽くる所は。最明寺殿さへ修行
に御出で候ふ由うけたまはり候ふ間。何とも了簡
なく候。

ワキ「あら痛はしや候ふ。今夜の御宿の御恩に。此をさ

なき人を三日が間に世に立てゝ参らせうずるにて
候。

男「是は何とやらん誠しからず候。

ワキ「御不審尤にて候ふさりながら。世には奇特なる事
もあるものにて候。唯某に御まかせ候へ。

男「さらばたのみ申さうずるにて候。

ワキ「さて藤栄殿の在所はいづくにて候ふぞ。

男「あれに見えたるが藤栄殿の御館にて候。今日は浦

遊びに御出で候ふよし申し候。

ワキ 「さらば浦にいで、彼人に逢ひ申し候ふべし。又此重書をば某に御あづけ候へ。月若殿をば御同道候ひて。あとより御出であらうずるにて候。

男 「心得申し候。

シテ詞 「是は芦屋の藤栄にて候。今日は日もうらゝに候ふ間。浦遊びに出でばやと思ひ候。いかに誰かある。

トモ詞 「御前に候。

シテ 「浦遊びに出で候ふべし。舟の事申し付け候へ。

トモ 「畏つて候。

シテ 「いかに誰かある。あれに当つて笛鼓の音の聞え候ふは。いかなる事にてあるぞ尋ねて来り候へ。

トモ 「畏つて候。尋ね申して候へば。鳴尾殿の御酒迎に。囃物をして御出であると申し候。

シテ 「さらば此所にて待たうずるにて候。

トモ 「然るべう存じ候。

鳴尾 「川岸の。」

地 「川岸の。根白の柳あらはれにけり。そよの。」

シテ 「あらはれて。いつかは君と。」

地 「君と。」

シテ 「われと。」

立衆 「我と。」

シテ 「君と。」

地 「枕さだめの。やよがりもそよな。」

シテ詞 「是までの御出過分に存じ候。」

鳴尾 「某に御かくし候ふほどに。御酒迎の為に酒を持

たせて候。一つきこしめされ候へ。」

シテ 「かゝる祝着なる事こそ候はね。さらば一つ給べうず
るにて候。」

ヲカシ 「いかに藤栄殿へ申し候。某が舞をそとさし申さう
ずるにて候。」

シテ 「たべ酔ひて候ふ程に舞はうずるにて候。吉野立田

の花もみぢ。

地「更科越路の月雪。（舞）

地クリ「それ舟の起りを尋ぬるに。みなかみ黄帝の御宇よりおこりて。ながれ貨狄が謀によれり。

シテサシ「こゝに又蚩尤といへる逆臣あり。

地「かれを滅ぼさんとし給ふに。烏江といふ海を隔てゝ。攻むべきやうもなかりしに。

クセ「黄帝の臣下に。貨狄といへる士卒あり。ある時貨

狄庭上の。池の面を見わたせば。をりから秋の末なるに。寒き嵐に散る柳の。一葉水にうかびしに。又蜘蛛といふ虫。是も虚空に落ちけるが。其一葉の上に乗リつつ。次第々々にさゝがにの。いとはかなくも柳の葉を。吹きくる風にさそはれ。汀によりし秋霧の。立ちくる蜘蛛のふるまひ。げにもと思ひそめしより。たくみて船をつくれり。黄帝これにめされて。烏江を漕ぎわたりて。蚩尤をやす

く滅ぼし。御代を治め給ふ事。一万八千歳とかや。

シテ「しかれば船のせんの字を。君にすゝむと書きたり。

さて又天子の御顔を。龍顔と名づけ奉り。船を一葉と言ふ事。此御宇より始まれり。又君の御座舟を。龍頭鵠首と申すも。此御代よりおこれり。

ワキ詞「たゞ今舞まうたるものゝ名字をば何といふぞ。

ヲカシ「藤栄殿と申して隠れなき人候ふよ。

ワキ「其藤栄に。先の舞こそ面白けれ。今一さし舞へ見

うといへ。

ヲカシ「それはたが左様に申し候ふぞ。

ワキ「愚僧が言ふと言へ。

ヲカシ「心得て候。いかに申し候。あれなる修行者の藤栄殿の舞こそおもしろけれ。今一番舞へと申し候。

シテ「さやうに申すはあれなる修行者の事にてあるか。

ヲカシ「さん候あれにて候。

シテ「やすき間の事。舞をば以前まうてある間。今度は

八撥を打つて聞かせうずると申し候へ。

ヲカシ「シカく。」

シテ「いや／＼苦しからぬ事にて候ふ左様に申し候へ。

ヲカシ「畏つて候。いかに申し候。唯今の由申して候へば。

舞をば以前に御まひ候間。八撥を打つて御見せあらうずると仰せ候。

ワキ「急いで打てと言へ。

シテ「ゆくへもしらぬ修行者に。舞一さしと乞はれたる

は。あつぱれ藤栄が為めには面目にて候。総じて八撥を打ちたる事はなけれども。あまりに彼奴が憎さに。わざと撥を大きにあつらへ。小笠の内へ見参申さでは叶ふまじ。

地「もとより鼓は波の音。よせては岸をどうとは打ち。

天雲まよふ鳴神の。とゞろ／＼と鳴る時は。降りくる雨ははらくはらと。小篠の竹の。音も八撥も。いざ打たういざ打たう。

シテ詞

「此上はさし扇をのけられ候へ。小笠の内へ見参申さう。」

ワキ詞

「やあ是こそ鎌倉の最明寺実信よ見忘れたるか藤栄。なにとて八撥うたぬぞ打てとこそ。汝は過分の振舞かな。何とて総領月若をば追ひいだし。いやしき海士の奴となす事。前代未聞の僻事なり。われ諸国を修行する事全く余の儀にあらず。かやうの在々所々の政道を致さんが為めなり。いかに

月若。あら不便や此間さこそ無念にありつらんな。事おほしといへども。けふは最上吉日なれば。芦屋の庄七百餘町の所。月若が知行たるべきなり。又藤栄が事は重科人の事なれば。いかなる流罪死罪にも行ふべけれども。よし／＼慈悲は上より下り。仇を恩にて報ずるなれば。汝が知行それは相違あるべからず。今日よりしては総領を総領とし。一家繁昌たるべしと。かさねて安堵を下しければ。

地 「げにありがたき御政道。直なる時の世に出づる。

月若が心の内。天にもあがるばかりなり。

地 「やがて本宅に立ちかへり。く。知行の道もたゞ

しく。総領庶子繁昌し。一族の栄花きはもなし。

百姓も万民も。みな朝恩にほこりて。栄ふる御代

とぞなりにける。